

主 題：宮で教えられた方は誰なのか？

聖書箇所：ヨハネの福音書 7章14－36節

●「仮庵の祭り」

今朝、皆さんと続けて見ていきたいのは、ヨハネ7：14－36のみことばです。改めて情景を思い浮かべてみてください。先週から学び始めた7章は、ユダヤ人にとって最も大好きな「仮庵の祭り」が行われるタイミングでの出来事でした。毎年、収穫を終えた後の秋ごろに行われていたこの祭りには、エルサレム周辺に住む成人男性は必ず参加を求められ、祭りの期間中、町は何万、何十万の人であふれ返っていました。それだけでなく、仮の住まいもたくさんあふれていました。見渡せば家の屋上から路地裏、広場に至るまで、ありとあらゆるところに枝や葉っぱで作られた仮の小屋が立ち並び、人々はそこに1週間ほど寝泊まりしていたのです。いったいなぜこのようなことをしていたのでしょうか。祭りの理由を覚えていらっしゃいますか？それはイスラエルの人たちが、かつて神様がエジプトの地から助け出してくださったことや、荒野でさまよっていた時にも変わらずに養い、守り導いてくださったことを、常に忘れず覚えているためでした。神様ご自身がこの祭りの目的をはっきりと述べています。レビ記23：42－43で「:42 あなたがたは七日間、仮庵に住まなければならない。イスラエルで生まれた者はみな、仮庵に住まなければならない。:43 これは、わたしが、エジプトの国からイスラエル人を連れ出したとき、彼らを仮庵に住ませたことを、あなたがたの後の世代が知るためである。わたしはあなたがたの神、主である。」と。ですから、すべてのユダヤ人にとって、この祭りの1週間は、1年の中で最も大きな喜びの時でした。汗水流して働いた成果、麦やぶどうなどの収穫を神様に感謝して楽しみ、かつて神様が自分たちになしてくださった恵みのみわざを思い巡らせて感謝することもできました。この祭りは年齢も立場も関係ありません。子どもからお年寄りに至るまで、貧乏人から金持ちに至るまで、奴隷から指導者に至るまで、ありとあらゆる人たちが同じ町に集って、ともに喜びを分かち合っていました。まさにこの祭りの期間、エルサレムの町は大勢の人たちと、またその人々があげる歓声や賛美であふれる喜びの場所となっていたのです。しかし残念ながら、そんな場所が今回は少し違っていました。本来であれば、ただ喜びとなるはずの祭りのうちに、大きな敵意が紛れ込んでいたのです。それは7章の出来事の約1年前になる5章でも、同じようにエルサレムを訪れたイエス様があることを行ったゆえでした。イエス様は、安息日に38年もの間、床に伏せていた病人をいやして、その後にはご自分が父なる神と等しい同じ神だと証言したのです。これこそ間違いなく確かな真理ではありましたが、しかし、この出来事をきっかけに、激しい憎しみを抱いたユダヤ人指導者たちは、イエス様を迫害して、イエス様を殺そうとするようになりました。この時、燃え上がった怒りは少しも薄れることなく、1年経った後の「仮庵の祭り」にあっても、彼らはあの憎き存在はどこにいいのかと、必死になって探し回っていたわけです。エルサレムの町に足を一歩踏み入れて、一瞬でも彼らの目に留まれば、文字どおり、いのちが奪われる危険が現実の問題としてあったのです。大きな喜びと大きな敵意が入り混じった1年で最大の祭り、それが今回見ている7章の場面背景でした。

この朝、皆さんと見ていくのは、そんな祭りへと自ら上って行かれて、そこでご自分がだれなのかを明らかにしたイエス様のことばです。14節を見てください。このように今回の場面が始まっています。

「しかし、祭りもすでに中ごろになったとき、イエスは宮に上って教え始められた。」と。この当時の宮、神殿の中庭という場所は、人目のつかない隠れた場所ではありません。この場所は多くの人たちが集まっていただけでなく、特にユダヤの教師たちが宗教的なことを議論する場所として知られていました。イエス様もこの宮がどのようなところなのか知らなかったわけではありません。よくわかっていました。と言うのも、イエス様がまだ12歳だった時、はぐれた両親がエルサレム中を探し回り、最後にイエス様を

見つけた場所は宮でした。そしてその宮でイエス様が何をしていたかと言うと、教師たちと話をしたり質問したりしていました。ですからイエス様は宮という場所がどのようなところか、よくわかっていました。そのような公の場所に、たくさんの人の目がある場所に、イエス様が姿を現して大胆に語り始めたら、間違いなくすぐに指導者たちの目にも留まることになったでしょう。しかし、それでもイエス様は語り始めました。何も恐れることなく、自分に殺意を持っている者たちがいるところに出て行きました。なぜでしょう。それはそこに救いを必要としている者たちがいたからでした。たとえ多くの人たちが信じず、かたくなに拒んで、敵意を露わにしたとしても、そこに救いを必要とする者がひとりでもいるのであれば、救い主として来られたイエス様は、ただ救いの手を差し伸べようとされたわけです。この方こそ、仕えられることよりも仕えることを望み、ご自分のいのちをささげた、愛に富んだ救い主でした。

○宮で教えられた方：イエス様の五つの姿

今朝は、そんな救い主ご自身が、ご自分について語っておられることばを見ていきたいと思います。そして、そのことばを通して、いったいこの方がだれなのかということを、改めて考えてみたいと思います。今回の箇所からは、特に五つの姿を見て取ることができますが、今週は二つだけです。考えたいことは、いったい宮で教えられた方がだれだったのか、この問いに対する答えが、私たちひとりひとりがイエス様をますます信頼して、ますますほめたたえるだけでなく、この方を何よりも愛する者として成長する励ましになることを心から祈っています。ではさっそく実際のことばを見てみましょう。

ヨハネ7：14－36

「：14 しかし、祭りもすでに中ごろになったとき、イエスは宮に上って教え始められた。：15 ユダヤ人たちは驚いて言った。「この人は正規に学んだことがないのに、どうして学問があるのか。」：16 そこでイエスは彼らに答えて言われた。「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです。：17 だれでも神のみこころを行おうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかがわかります。：18 自分から語る者は自分の栄光を求めます。しかし自分を遣わした方の栄光を求める者は真実であり、その人には不正がありません。：19 モーセがあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも、律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか。」：20 群衆は答えた。「あなたは悪霊につかれています。だれがあなたを殺そうとしているのですか。」：21 イエスは彼らに答えて言われた。「わたしは一つのわざをしました。それであなたがたはみな驚いています。：22 モーセはこのためにあなたがたに割礼を与えました。—— ただし、それはモーセから始まったのではなく、父祖たちからです。—— それで、あなたがたは安息日にも人に割礼を施しています。：23 もし、人がモーセの律法が破られないようにと、安息日にも割礼を受けるのなら、わたしが安息日に人の全身をすこやかにしたからといって、何でわたしに腹を立てるのですか。：24 うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい。」：25 そこで、エルサレムのある人たちが言った。「この人は、彼らが殺そうとしている人ではないか。：26 見なさい。この人は公然と語っているのに、彼らはこの人に何も言わない。議員たちは、この人がキリストであることを、ほんとうに知ったのだろうか。：27 けれども、私たちはこの人がどこから来たのか知っている。しかし、キリストが来られるとき、それが、どこからか知っている者はだれもいないのだ。」：28 イエスは、宮で教えておられるとき、大声をあげて言われた。「あなたがたはわたしを知っており、また、わたしがどこから来たかも知っています。しかし、わたしは自分で来たものではありません。わたしを遣わした方は真実です。あなたがたは、その方を知らないのです。：29 わたしはその方を知っています。なぜなら、わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わしたからです。：30 そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、しかし、だれもイエスに手をかけた者はなかった。イエスの時が、まだ来ていなかったからであ

る。:31 群衆のうちの多くの者がイエスを信じて言った。「キリストが来られても、この方がしているよりも多くのしるしを行われるだろうか。」:32 パリサイ人は、群衆がイエスについてこのようなことをひそひそと話しているのを耳にした。それで祭司長、パリサイ人たちは、イエスを捕らえようとして、役人たちを遣わした。:33 そこでイエスは言われた。「まだしばらくの間、わたしはあなたがたといっしょにいて、それから、わたしを遣わした方のもとに行きます。:34 あなたがたはわたしを捜すが、見つからないでしょう。また、わたしがいる所に、あなたがたは来ることができません。」:35 そこで、ユダヤ人たちは互いに言った。「私たちには、見つからないという。それならあの人はどこへ行こうとしているのか。まさかギリシャ人の中に離散している人々のところへ行って、ギリシャ人を教えるつもりではあるまい。:36 『あなたがたはわたしを捜すが、見つからない』、また『わたしのいる所にあなたがたは来ることができない』とあの人が言ったこのことばは、どういう意味だろうか。」

1. 神様の教えを教えるイエス様 14－17節

一つ目の姿は、「神様の教えを教えるイエス様」でした。単なるいち教師ではありません。イエス様は、神様からのことばを伝える神の教師でした。もう一度みことばを見てください。14節からこのように始まっています。「:14 しかし、祭りもすでに中ごろになったとき、イエスは宮に上って教え始められた。:15 ユダヤ人たちは驚いて言った。この人は正規に学んだことがないのに、どうして学問があるのか」と。この場面を思い描いてみてください。ほんの数日前、弟たちから「早くエルサレムに行きなさい。隠れたところではなく公の場で人目につく場所で力あるわざをなしなさい」（3－4節）と言われた時、イエス様は「まだわたしの時は来ていません」（6節）と断られていましたが、祭りも中盤にさしかかったころ、ご自分の時が遂に來たことを知られたイエス様は、祭りへと上って行かれ、宮で教え始められるのです。どのようなことを教えていたのか、具体的には記されていませんが、私たちは容易に想像することができます。イエス様は人々の前で、何度も何度も同じ主張を繰り返していました。「わたしは世を救うために來ました」、「わたしは、わたしを信じる者に永遠のいのちを与えます」、「わたしと父とは一つです」、「わたしには死者をよみがえらせることができ、また、わたし自身も死からよみがえります」、「わたしには罪を赦す権威があり、すべてのものをさばく権威までもが与えられています」、「わたしは安息日の主、世の光、いのちのパン、キリストです」、「わたしは神のひとり子です」と。この方がなされる主張は、これまでだれも聞いたことのないようなものでした。知恵と知識と力や権威にあふれたその教えは、耳にした人たちのうちに、常に驚きや関心をもたらしてきました。

たとえば、イエス様の働きの最初のころ、山上での説教を終えた後、その教えを聞いた群衆たちはどのような反応をしていたでしょう。彼らの様子がマタイ7:28－29で「:28 イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。:29 というのは、イエスが、律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教えられたからである。」と。ここで使われている「驚いた」ということばは、少し慌てたとか、少しだけ驚いたというような様子を表しているではありません。このことばは、イエス様が、嵐を静められた後、悪霊を追い出した後、口のきけない者を話せるようにし、目の見えない者を見るようにした後、その光景を見た人たちの反応に使われているのと同じものでした。つまり、この「驚いた」は、少しの驚きではなく、目の前に広がっている光景に対して、驚愕している、腰を抜きそうになっている、開いた口が塞がらないというような、大きな驚きを表すことばです。

このことばが、今回の箇所でも使われていました。宮に上って教え始められたイエス様のことばを聞いた者たちは、心底驚いたのだと。そして驚いた彼らは、ある一つの疑問、いや疑問というよりも一つの非難を口に出していたわけです。15節で「この人は正規に学んだことがないのに、どうして学問があるのか」と。すでにご存じの方もおられるかもしれませんが、この当時、このように宮で教えていたユダヤ人の教師たちは、通常学校に行きました。認められた教師の弟子、立派な教師の下で学んだ者たちだ

けが、聖書を解釈したり、聖書を理解したり、律法について論じる資格を持っているとされていたわけです。またそのように学校で学んだ者たちが論じる資格を持っていただけではなく、彼らが実際に人前に出て話し、教える時にはいつもほかの教師のことばを引用していました。たとえば「この律法に関しては、このようなことばをA先生が残していました」、「この説明をB先生もしていました」、「その聖書の理解については、かつてC先生とD先生が話し合っ、このような結論が出されました」というように、彼らのうち、だれも己の権威で話すようなことはありませんでした。彼らが会話をなす時、彼らが教える時、いつもそこには人の引用がありました。彼らは自分たちの発言というものが、伝統に則った真実のものであると証言するために、常にほかの教師たちの権威に拠り頼んで話していたわけです。当時の宮に行けば、聞こえてくることばは、人が人を引用するものばかりでした。そのような教えが当時の一般の常識だったわけです。

ですから、イエス様が宮で語られた時、人々は驚きました。人々はイエス様の違いにすぐに気がついたわけです。宮で語り始めたイエス様は、どの教師の名前もいっさい出すことはありませんでした。だれかのことばを引用することはいっさいなく、ただご自分のことばでもって話したわけです。学校に行き、立派な教師の下で学び、立派な服を着て、みなから教師として尊敬されるような者たちの前で、ガリラヤ出身のひとりの大工が、大胆にも聖書のことばをだれの引用もせず語ったわけです。ですから人々はひどく驚きました。彼らは目の前に広がっている光景の意味がわからず、不満を覚えたのです。「あなたはいったいどの学校に行ったのですか？」、「あなたはいったいどの教師から学んだのですか？」、「いったい何の根拠があつて、何の確信があつて、このように大胆に語るのですか？」と、彼らは驚きと不満を覚えました。そのような彼らに対して、イエス様ははっきりと答えるわけです。16節に「そこでイエスは彼らに答えて言われた。「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです。」と。イエス様の教えは、イエス様を遣わされた方、父なる神様のものでした。イエス様は人のことばを引用する必要はありませんでした。イエス様はだれにも教えられる必要はありませんでした。イエス様は家に帰って、ほかの教師たちの教えを調べる必要もありませんでした。この方が口を開けば、そこから出てくることばはすべて神様のことばでした。イエス様が話されたひとつひとつのことばは、どれをとっても神様ご自身が話されることばでした。まさに、イエス様は神様の教えを教える、神様だけが知っていることを明らかにできる、そのような神の教師だったわけです。

これと同じ真理を、イエス様はほかの箇所でも同じように口にしています。ヨハネ8：28「イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げてしまうと、その時、あなたがたは、わたしが何であるか、また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。」と。また12：49－50でも同じことを繰り返し言われています。「：49 わたしは、自分から話したものではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。：50 わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。それゆえ、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのままに話しているのです。」と。当時のユダヤの指導者たちは、何の学も持っていないイエス様には語る資格がないと思いました。どこの学校にも行っていないような者には語る資格はないのだと。しかし、実際はこの方ほど神のことばを語る資格のある者はいませんでした。宮で語られたイエス様こそ、神様のことばを直接教えることのできた最高の教師だったのです。神様のことばが、イエス様の口から出てきました。

ここで少し立ち止まって考えてください。今、7：14－16を見ましたが、ここで語られていることばを、果たして私たちは本当に信じているのでしょうか。イエス様のことばが、本当に神様のことばなのだ、この世界だけでなく、私やあなたを造られた創造主であり、すべてをご存じの知恵ある主権者のことばなのだ、本当に信じているのでしょうか。日曜日の礼拝でも、毎日、皆さんが聖書を開く時も、この聖書の中にイエス様が直接語られたことば、また、神様の靈感を受けて動かされた著者たちによっ

て書かれた神様のことばを見ることができます。私たちは神様のことばをここに見ます。このことばは、私たちがこの世にあって良い人生を送っていくための単なる良いアドバイスではありません。もっと良い人になるための提案でもありません。私たちが聖書を開くその時、そこにあることばはすべてまことの神様が私たちに語っていることばなのです。「人は新しく生まれなければ神の国を見ることができない」とか、「信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つ」という私たちの救いに関することばもそうです。「互いに愛し合いなさい」、「互いに赦し合いなさい」、「互いに仕え合いなさい」といった私たちの信仰生活の歩みに関わることばもそうです。この中に含まれていることばは、どれをとっても知恵のある神様が私たちに直接語られていることばでした。ですから私たちはほかのものを考えないのです。この講壇で語るいろいろな先生も聖書しか語らないのです。ここに書かれていることが神様のことばだと信じているからこそ、私たちはそのことばを信じて、そのことばを学んで、そのことばに従っていかうとするわけです。

自分自身に問いかけてみてください。自分の信仰生活において、自分には本当に何が必要不可欠だと思っているでしょう。何が絶対に欠かせないと思っているでしょう。夫婦生活において助けを必要とする時、どこに助けを求めるでしょうか。テレビやネットで言われていることでしょうか。それとも神様のことばでしょうか。子育てにおいて知恵を必要とする時、どこに知恵を見出そうとするでしょうか。だれもが感心するような先生や、子育て術を教えているような本でしょうか。それとも神様のことばでしょうか。仕事や学業、老後の生活など、日々の生活において起こるさまざまな出来事において、励ましや希望を必要とする時、信仰者としていろいろなところで罪との戦いを経験し、その罪との戦いに必要な武器を見出そうとする時、どこにそれを見出そうとしているでしょうか。世が与えてくれる何かでしょうか。まわりにいる人たちでしょうか。それとも、神様のことばでしょうか。もちろん、いろいろな面で、私たちは人の知恵やアドバイスも聞くことができます。助けや支えを得ることができます。神様はまわりの人たちを通して働くことのできるお方です。しかし同時に、最終的な判断や選択を、私たちはいったい何にゆだねているのでしょうか。何によって動かされているのでしょうか。何を頼りにしているのでしょうか。世の中の人たちは言います。「専門家の意見を頼りにしましょう。自分の良くわからない分野に関しては、その道のプロに任せましょう。」と。しかし、全知全能の神様に何か知らないことがあるのでしょうか。この方が持っていない知恵や知識がこの世にあるのでしょうか。そのようなものは一つもありません。私たちのいのちと経験に関するすべてのことは、この本の中に記されています。イエス様に似た者に変えられていくのに十分な知恵や助けは、この本の中に与えられています。神様の栄光を現わすために生きていく目標や責任、働きを持っている私たちに必要な助けや知恵、励ましや希望は、神様がこの本を通して、今も私たちに語り続けてくれています。

ペテロもこのようなことばを残していました。Ⅰペテロ1：24-25に「**24 人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。25 しかし、主のことばは、とこしえに変わることはない。……**」と書いていました。たとえ、この世のすべてのものが揺らいでしまっ、この世のすべてのものが変わり果てていったとしても、この主のことば、神様のことばだけは、いつまでも変わることがありません。この変わらないことばに、どれほど日々、耳を傾けようとしているのでしょうか。どれほど神様のことばが、自分に必要不可欠な宝物だと心に留めているのでしょうか。さっと読んでわからないからと、ほかのものを足すのですか。そうではないです。変わらないことばにどれだけ縋り、それを知ろうとして、このことばを口ずさみながら歩んで行こうとしているのでしょうか。私たちの成長に必要なものはここにあると、神様が直接語ってくださっているのです。

しかし、残念ながら、この時イエス様の教えを聞いていた指導者たちは、イエス様が何者なのかを理解できませんでした。確かに、その教えに驚きはしましたが、イエス様の教師としての資格に疑問を抱いて、初めから従うことを望まなかった彼らには、その教えが神様からのものであると受け入れること

はできなかったわけです。ですから、イエス様は非難の意味を込めてこう口にされました。17節に「だれでも神のみこころを行おうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかわかります。」と。彼らはイエス様のことばが神様からのものであるかをわかりませんでした。それは彼らがそのことばに従いたくないと思っていたからです。そして、従いたくないと思っている人には、これが神様のことばであるかどうかはわかりません。しかし、私たちは違います。私たちは今、イエス様が確かに神様のことばを語っていたのだと知っています。天から下って来られたこの方が、神様のみこころを明らかにしてくださったのだと信じています。それなら、私のこころがなるようにではなく、主のみこころがなされるようにと、それを一番に追い求めていくことです。ここにそのことばが、そのみこころが記されているのであれば、このことばのすべてに忠実に従っていくことです。みこころに従いたいとわたしが願うのであれば、みこころが記されている聖書を、わたしがいつも宝として歩いていくことが欠かせません。そして、そんな神様のことばとともに歩むことこそ、最高の喜びがあるのです。詩篇の著者もこう述べていました。1:2 まことに、その人は主の教えを喜びとし、昼も夜もその教えを口ずさむ。:3 その人は、水路のそばに植わった木のような。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」と。宮で教えられていた方は、いったいだれだったのか——。その名はイエス。神様の教えを教える神の教師でした。この方が語っていたことはすべて神様のことばでした。それが一つ目の姿だったわけです。

2. 神様の栄光を求めるイエス様 18節

宮で教えられていた方の二つ目の姿は、「神様の栄光を求めるイエス様」でした。みことばに戻ってください。18節に「自分から語る者は、自分の栄光を求めます。しかし自分を遣わした方の栄光を求める者は真実であり、その人には不正がありません。」と。ここで言われていたことば、立ち止まってよく考えてみてください。父なる神様によって世に遣わされたイエス様は、遣わされた方のことばだけを宣べ伝えました。このようにして宣べ伝えたイエス様は、ご自分の栄光を求めることは一度もありませんでした。この地上での生涯において、神の教師がなしたことは、常に父なる神様の栄光を現わすことであって、自分自身に称賛や名誉を集めようとは決してなさらなかったというわけです。個人的な栄誉をいっさい求めない、それが真実なイエス様の姿でした。

その一方で、当時のユダヤ人指導者たちは違っていました。イエス様のことばを聞いていた彼らの心は、神様ではなく常に自分に向いていました。人前でふるまったり、多くのことを語っていた彼らの関心は、いかに自分自身が称賛や名誉を得られるかにありました。どのようにして人々の目を自分自身に向けるかに心がとらわれていたわけです。個人的な栄誉を何よりも求める、それが不正にあふれた指導者たちの姿でした。実際、そのような彼らの姿は聖書の中にも多く描かれています。たとえば、マタイ23:5-7で、イエス様は彼らの高慢な態度を次のように描いていました。「:5 彼らのしていることはみな、人に見せるためです。経札の幅を広くしたり、衣のふさを長くしたりするのもそうです。:6 また、宴会の上座や会堂の上席が大好きで、:7 広場であいさつされたり、人から先生と呼ばれたりすることが好きです。」と。マタイだけではなく、今学んでいるヨハネの中でも同じでした。5:44で、ご自分に敵意を燃やす指導者たちに向かって、イエス様はこう言われます。「互いの栄誉は受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたは、どうして信じることができますか。」と。明白なのは、この指導者たちは自分たちこそ神様の栄光を求めていると思っていました。しかし、実際はそうではなかったということです。彼らは自分たちの栄光を求めています。もし自分の栄光を求めることができる者がいるとしたら、それにふさわしいのは、ほかのだれでもないイエス様だけでした。この方は、天から遣わされた神の御子でした。すべての権威が与えられていた、唯一ほめたたえられるべき、まことの神様でした。この方こそ、この方だけが、ご自分の栄光を求めても間違いではありませんでした。しかし、このお方は仕えられる

ことよりも仕えることを自ら選びました。どんな時も、人からの榮譽を受けることよりも、苦しみを受け、父なる神様の栄光を現わすことを喜んで求め続けたわけです。

かつてパウロも、このへりくだった主の姿を次のように描いていました。ピリピ2：6－8で「:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。:8 人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」と。ここで鍵となることばが出てきました。「神のあり方を捨てられない」の「捨てられない」ということばです。このことばには、もともと「何かにしがみついて手放そうとしない」や「何かを握りしめて手放そうとしない」という意味だけでなく、「自分自身の益のために利用する」といった意味が含まれていました。つまり、まことの神様であったイエス様には、神様として、神のあり方にしがみついて放さないことは、もちろん可能でした。しかし、この方は神のあり方を捨てられないとは考えませんでした。この方は自ら進んでご自分が持っている神様としての力や権利、立場をご自分の益のために利用しようとは考えなかったというわけです。忘れてはいけません。本来であれば、イエス様こそがありとあらゆることをご自分の思いのままにできる権利を持っていた。天にあって天使や聖徒たちからあがめられることも、地上にあってすべてのものからほめたたえられることも、神の御子であるこの方には、それが最もふさわしいことでした。ご自身が持っている力や権利を自分のために用いたところで、だれも何の文句も言えません。それが当然、価するのがイエス様だったわけです。それがこのまことの神様でした。すべてを持っていたにもかかわらず、イエス様はご自分を喜ばせるために、その特権や権威を用いようとはしませんでした。完全な神様であるイエス様は、その代わりに、私たちと同じように人となって、仕える者としてこの地上に来てくださったというわけです。イエス様にはご自分の持っている特権や権威を主張する権利が常にありましたが、そのような最高の特権を喜んで横に置いて、この世に来て、父なる神様のみこころに忠実に従って、最後の最後まで自分に与えられた働きを全うしたわけです。この方が横に置きました。

少し思い返してみてください。さまざまな箇所から、イエス様の示された姿を見て取ることができます。一つの模範がマタイ26章にあります。ゲッセマネの丘で、イスカリオテのユダとローマの兵士たちが自分を捕らえにやって来た時、その人たちを見てイエス様はこのように口にしました。26：52－53「:52「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。:53 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとも思うのですか。」と。イエス様のことばは、はったりだったのでしょうか。十二軍団よりも多くの御使いを遣わせて、取り囲んでいるその兵士たちを滅ぼしてしまうというのは、単に口だけで実際はできなかったのでしょうか。いいえ、もちろん可能でした。その力、権利、権威はイエス様のうちにありました。しかし、それを行使することはなかったわけです。どうしてでしょう。続きの節に書いていました。54節「だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましょう。」と。イエス様は、窮地に陥っている自分のことを考えていたのではありませんでした。大変な状況に陥っている自分の望みや願いを叶えることを優先していたのではありませんでした。そうではなく、父なる神様のご計画が成し遂げられること、神様の栄光が現わされること、そこに、いつも心を留めていたわけです。人間的に考えれば、もっとも神様の栄光以外のことや、神さまのみこころに従う以外のことに目を向けてしまってもおかしくないような状況にあって、イエス様はいつも神様の栄光を現わすことを選びました。その目的の妨げになるのなら、ご自分の持てる力や権利を行使しようとはしなかったわけです。これは、イエス様だからできたのでしょうか。イエス様だから容易だったのでしょうか。イエス様には簡単なことだったのでしょうか。その後の状況を思い出してみてください。この時、イエス様は兵士たちに捕らえられ辱めを受けた後、十字架につけられることをわかっていました。その十字架で味わう苦しみがいかに辛く、耐え難いものなのかをご自身よくわかっていました。だからこそ、兵士たちが

捕らえに来る直前、イエス様は何をしていましたか？イエス様は苦しみを前にして悲しみにもだえながら、ひとり、ずっと祈っていたわけです。マルコ１４：３６に「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。」と。この苦しみを阻止する方法を、もし自分が持っていたとしたら、自分のことを考えて、自分が持っている方法を行行使することは簡単なことだったでしょう。イエス様はこの状況を回避する方法を持っていました。しかし、どのような状況に置かれたとしても、この方は、わたしの願うことではなく、あなた（父）のみこころのままになさってくださいと、みこころに従うことを選びました。最後まで自分自身の益や栄誉を求めることをしなかったのです。これが、世に来てくださった救い主の姿でした。これこそが、私やあなたの罪のために十字架にかかるために来てくださった、へりくだったイエス様の姿だったわけです。

このようなキリストの姿を覚えるなら、私たちは何を求めるのでしょうか。個人的な栄誉、個人的な栄光、いつも人のことを考え、人から良く思われることを求めるのでしょうか。それとも、ほめたたえられるべきイエス様がなされていたように、ただみこころに従い、ただ神様の栄光を現わすことでしょうか。ここで問われるのは、私たちの謙遜です。自分の栄光を求めていくことと神様の栄光を求めていくこと、自分自身を愛し続けることと神様を愛し続けることは、共存することができないからです。どちらかだけに片足を突っ込んで、どちらかもやります。そのようなことはできません。どちらかしかできません。神の御子、すべての権威を持つイエス様は、進んでへりくだられたお方でした。私たちはどうでしょう。たとえ、自分自身の権利があったとしても、それを自ら横に置いて、進んで喜んで犠牲的に相手に仕えようとするのでしょうか。自分に好意を持っている者、自分に敵意を持っている者、どちらがいたとしても、真っ先に自分のことを考えるのではなく、その人の益となることに心を留めようとするのでしょうか。それとも自分の権利を手放さずに、いつも自分の権利を主張して、結局は自分のためにすべてをなそうとしているのでしょうか。

このみことばは、私たちがだれかを指さすためのものではありません。私たち自身が考えるべきことです。もちろん、私たちににとってへりくだるということほど難しいものではありません。状況や相手に心をとらわれてしまうことも多々あります。それにとらわれてしまっている時は、へりくだって仕えることが難しく、不可能に思えるようなこともあるでしょう。ですから皆さん、私たちはいつも覚えていることが大切でした。イエス様は、私たちがまだ罪人であった時に、私たちがまだ神様の敵として歩んでいた時に、自ら十字架にかかってご自分のいのちをささげて、私たちに神様の愛を明らかにしてくださいました。本来なら、私たち自身が受けるべき罪の罰を、神の御怒りを、神の御子が代わりになって十字架で受けてくださったわけです。仕えられるべき王が仕える者となって、代わりに苦しんでくださり、あがめられるべき罪のないお方が、代わりに罪となって死んでくださったから、罪を心から悔い改めて、この方を自分の救い主として信じ受け入れる者に、救いが与えられる約束があるのだと確信することができるのです。へりくだってくださった主が、神のあり方を捨てられないとは考えずに、私たちにあわれみの手を差し伸べてくださったから、私たちは今、罪の赦しにあずかっているということです。私たちは今新しく造り変えられて、天に国籍を置く者として、主にお会いする日を楽しみにしながら生きていくことができるということです。

そして、その愛とへりくだりを知ったのであれば、私たちの応答は何でしょう。宮で教えられていた方、その名はイエス。神のことばを伝えた教師であり、神の栄光とみこころを追い求め続けた救い主でした。この偉大な主の姿を覚えるのであれば、私たちにできる応答は、この方の前にへりくだって、同じようにみこころを求めて、同じように神様の栄光を現わして生きていくことです。賛美に値するそのお方にふさわしい賛美をささげながら、日々を歩んで行くことです。きょう、私たちは、イエス様の姿を二つ見ました。残りの三つを来週見たいと思います。どんな時もイエス様の姿を見て、イエス様の姿

を通して、どのようなお方が私たちの救い主なのか、どのようなお方が私たちの主人なのかを、思い巡らして、この方を愛する者として、今週もともに歩んで行きましょう。